



幼児の園庭遊びとそれを支える環境資源の検討

炭谷, 将史

(Degree)

博士 (教育学)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2023-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8240号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008240>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏名 炭谷 将史
 専攻 人間発達専攻
 指導教員氏名 野中 哲士

論文題目

幼児の園庭遊びとそれを支える環境資源の検討

論文要旨

かつて日本には子どもにとって豊かな外遊びの環境が街中に存在していたが、現在は外遊びの環境は劣化し、子どもたちが自由に遊べる場所は限られるようになった。このような社会的状況から、幼児が1日の大半の時間を過ごす幼児教育施設の園庭は重要な外遊びの場であると言える。幼児教育・保育施設の園庭遊びは街中の公園での外遊びとは異なり、子どもたちの学び、育ちが期待された保育活動の1つであり、園庭は重要な保育環境の1つである。

実際に保育実践として工夫されている園庭が日本全国に存在し、そこでは保育理念等に基づいて多彩な工夫が織り込まれている。その工夫とは、園庭を保育の中心と位置づけ、終日園庭で遊ぶことを想定して作られた園庭、「食べる」などのテーマに沿って作られた園庭、運動の場としての園庭、地域との交流拠点と位置づけられた園庭、などであった。学術研究においては、保育環境としての園庭の意義に関する研究、園庭環境・園庭遊びの実態に関する研究、保育者による園庭遊びの支援に関する研究、園庭での遊びを記述する方法など、多岐に渡る視点が園庭に向けられている。これらの実践・研究において、多くが遊びを育ちのための手段と位置づけられている点、および遊びを既存の分類やテーマに基づいて観察した、巨視的な視点からの議論が多い点、を踏まえて異なる視点から研究を積み重ねる必要性を指摘した。遊びそのものが園児たちにとって楽しく、充実することを目指した研究を積み重ねること。さらに、遊びで起こったことを具体的に、細かく見て、そこから議論をスタートさせるような研究は少なく、遊びの具体の中に浮かび上がる園児と取り巻く環境のインタラクションを記述すること、が必要であると考えられた。子どもの行為を細かく観察することで環境が備える機能的価値を明らかにした研究は、乳児と段差の関わりを細かく記述した佐々木(2011)に端を発する。より微視的に遊びを観察することで園児と環境との交わりが見え、園児にとって、より充実した遊びを展開できる園庭のあり方を検討できると考えられた。

これらの課題を踏まえ、本研究は「園児たちが何をして遊び、何を楽しんでいるのか」、「その遊びを支えている環境の資源は何か?」という2つの問題にアプローチした。本研究では環境を記述し、生体が環境の中に見出す機能的価値に基づいて可視化する生態学的地図という地図作成法を用いてこれらの問題に対する分析を進めることとした。

本研究では2つの実証研究を行なった。研究1では保育所園庭にある砂場を対象として、そこで遊ぶ園児たちの観察を行った。園児たちの遊びを具体的に把握するために、遊びのプロセス(遊びの始まり、遊びの展開の萌芽、遊びの展開、遊びの終わりのきっかけ)に留意しながら、遊びの中で見られた行為を記述した。行為や移動と場所の関係を分析した結果、園児たちが水を流すことから遊びを始めていた姿が見えてきた。その水の流れを見ながら、次第に砂をいじり始めていた。水路やダムなどを作りつつ、時折水を流してその出来栄を確認していた。遊びが分散的に終わった1つの事例を除くと、水が園児たちの設えた制約を越えて動き出したことが展開の萌芽となり、遊びが展開し始めていた。そして遊び終わりでは園児たちが自ら終わろうとしたわけではなく、本人たちが意図しない何らかの理由によって終わらざるを得なくなる様子があった。園児たちの遊びは初めから完成のイメージや計画があらかじめあったのではなく、探索に基づき、予想外の偶然の出来事を活かしながら進行していた。それらを支えていたのは水の存在、そしてその水に動きを与える斜面、水の運搬をしやすくしていた石段、砂をいじる、水を流す、砂をいじるといった遊びの中心的な行為とそれ以外の行為が干渉しないレイアウトであった。

研究2では研究1よりやや巨視的な視点を持って自由遊び時間全体を園児たちがどのように使い、遊びを展開しているかを分析した。また、園庭のレイアウトが遊びとどのようにつながっているかを明らかにするために、同一の園庭の遊具のレイアウトを改変し、改変前後の遊び方を比較することで、園庭のレイアウトが遊びとどのように関わっているかを明らかにすることを目的とした。遊びの観察では遊びの中に現れる行為を10のカテゴリーに分類し、研究1と同様に遊びの始まり、遊びの展開の萌芽、遊びの展開、遊びの終わりというプロセスを考慮して、園児たちの遊びを記述した。その結果、遊び方の違いを複数確認した。改変前の園庭では園児たちは遊びを短時間で変え、時間が経つにつれて次第に全員が砂遊びをするようになっていき、対象園児全員が長い時間砂遊びをしていた。改変後の園庭では長く続く遊びは個人によって異なり、改変前に比べて多様になっていた。エリア間の移行も改変前後で異なる傾向が認められた。改変前は場所移行に典型的なパターンがあったが、改変によってこのような典型的な移行パターンがなくなり、園児たちが多様な動き方をしながら園庭を縦横に活用していた。また、面積が狭くなったオープンエリアでの遊び方が変わっており、新たにスポーツ遊びが生じていた。改変前と比べて改変後の遊びの方において身体活動量が有意に増加していた。改変前後に共通する遊び方として、物と人の両方と関わるような遊び方が多く、長く継続する遊びのほとんどが物と人の両方と関わる遊び方であった。これらの結果から、レイアウトの改変によって遊びが多様になり、園庭をより広く活用できるようになっていた。遊びの多様化は園児間のインタラクションにも当てはまり、改変前の遊びではなかった相互関係が改変後の遊びでは生じていた。各エリアでの滞在時間のデータから、遊びの多様化をもたらした環境資源として、段差や斜面の存在、遊びの場所と移動路を分けるレイアウトの存在、利便性の向上などが関連していると考えられる。また、身体活動量が増加した背景として、改変前は砂遊び等の静的な遊びが長く行われていたが、改変後はそれらが減り、身体を動かす遊びが多くなった1つの要因と考えられた。

(氏名 炭谷将史, No. 3)

2つの実証研究で観察をした園児たちの遊びは一樣ではなかった。園児たちは新しくまわりと出会い、それらと関係を作りながら遊びを成立させていた。まわりに協調するように関わり方を変え、時には自ら積極的に挑戦的な関わり方を試すことで楽しくなるような工夫をしていた。その複雑な遊びの中に共通する部分が見つかった。第1に遊び始めの行動が結果として探索的な役割を果たしていた。園児たちは砂場や園庭に入った時に何らかの行為をすることで遊びをスタートさせており、それが次の遊びへと繋がっていた。いわゆるその場所を探索しようという意図があったかどうかはわからないが、結果的にその場所を把握する探索行為として機能していた。第2に園児たちはまわりを見ること、まわりから見られることで行為を調節し、遊び方を変えていた。「見える・見られる」という関係性を活かした遊び方に4つのパターンが確認された。第3に遊びのプロセスの特徴が挙げられる。遊びの盛り上がりは園児の予想外の出来事によって生まれ、そこから遊びが展開していた。また、終わり際の園児たちのふるまいは園庭の持っている力を示唆している可能性が考えられた。第4に遊びの履歴を見ると、前に行われた遊び、放置された遊び道具が次の遊びの前提条件となっていたケースが数多く確認された。第5に園児間のインタラクションでは行為の対象となる物を介したインタラクションという視点から4つの関係性があると考えられた。特に多かったのは同種の物を共有しながら各自が並列的に遊ぶ関係であった。

このように遊びの中で園児たちの遊びの特徴や園児たちが楽しんでいたことを記述したことで、それらの行為を支えた環境の資源が浮かび上がってきた。特に重要と考えられた環境の資源は第1に段差・斜面であった。段差や斜面は平面では生まれにくい行為の可能性をいくつも生み出しており、実際に園児たちはそれを活用しながら遊んでいた様子が確認された。第2に水を活用するレイアウトであった。特に研究1の砂場に設えられた斜面、石段、また砂場と水場の距離など、水を活用するためには多様に織り込まれたレイアウト上の工夫が必要であることが明らかになった。第3に行為を分けるレイアウトであった。研究1では砂場内での砂の行為と水を運ぶ行為が、研究2では特定の場所に停留して遊ぶ行為と移動が、分けられていることがじっくりと遊ぶために重要であった。第4に豊富な道具であった。園児同士の交流はいくつかのタイプがあり、それらを鑑みた場合、道具の数や機能を踏まえて準備することが必要であると考えられた。このように本研究を通して、園庭環境にある資源が多様に遊びを支えており、園児たちはその資源を活用し、そのあり方に適応しながら遊んでいたことが具体的に見えてきたと言える。

最後に、園庭づくりに対する提言をした。第1の提言は園庭に「何を」置くだけでなく、それらを「どう」置くかということが重要であること。第2に園庭は保育実践における Hidden Curriculumであることを踏まえて園児たちにとっての機能的価値に基づいて、改変を繰り返しながら、継続的に園庭づくりをすること。第3に園庭の問題群とその解決方法を検討し、関係者が話し合いながら園庭づくりを進めること、さらにその際に遮蔽のあり方を検討することの重要性を指摘・提案した。

論文審査の結果の要旨

氏名	炭谷将史		
論文題目	幼児の園庭遊びとそれを支える環境資源の検討		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	野中 哲士
	副査	教授	梅宮 弘光
	副査	准教授	岡崎 香奈
	副査	教授	北野 幸子
	副査	多摩美術大学客員教授	佐々木 正人
要 旨			
<p>本論文は、幼児の主体的な遊びを幼稚園・保育園の園庭がどのように支えることができるのかという問題意識から、園庭における園児たちの自発的な遊びがどのように展開し、また園児たちの自発的な遊びの流れを園庭という場所がどのようにかたちづくっているのかという2点について、園庭において実際に生じた子どもたちの遊びの詳細な計測から実証的知見を得ようとするものである。</p> <p>第一章では幼児教育施設における遊び環境の現状をめぐる国内外の先行研究をレビューしている。さらに、異なる場所において実際に生じた行為によってそれぞれの場所を記述するエコロジカルマッピングと呼ばれる手法によって、園庭という場所が与える行為可能性を既存の遊び研究とは異なる仕方で具体的に描き出す可能性を論じている。</p> <p>第二章では、「園庭保育」を理念とする川和保育園の傾斜付き砂場での園児の遊びをマルチビデオカメラで記録し、遊びの進行と環境との関係に関する詳細な分析を報告している。分析を通して、高低差と傾斜、水、さらに可塑性を備えた砂が組み合わせさせた独特の場所が、水の流れや水路の形成、さらには水路の決壊といった豊かな出来事を生み出していること、さらに傾斜を流れる水の流れが、複数の園児たちの遊びをつなぎ、水の流れに沿って園児たちが遊びを共有する機会をもたらしていることを、園児の遊びを記述することで具体的に示すとともに、園児の遊びの流れのダイナミクスが、園庭という場所がもたらすさまざまな機会と密接不可分なかたちでかかわっていることをデータによって示している。</p>			

第三章では、幼稚園の協力のもと、実際に園児が毎日遊ぶ園庭に大幅な改変を施し、改変前後の6名の園児たちの遊びの変化が分析された。園庭の改変にあたっては、幼稚園の先生方と既存の園庭の問題をディスカッションする段階から著者が園庭改変にかかわっていたことをふまえて、同園の園庭において認識されていた具体的な問題を報告するとともに、どのような方針で園庭の改変が行われたかが詳細に記されている。6名の園児には活動量計を装着され、マルチカメラによって場所ごとの行為の持続時間が定量的な解析の結果、同一の園庭ではほぼ同一の遊具であったにもかかわらず、遊具の配置の変化によって遊びのヴァリエーションは大きく変化しており、とりわけ、鉄棒などを用いて周囲との区切りをつくったオープンエリアにおいて改変後に遊びが持続するようになったこと、改変後に築山やタイヤなどの高さを用いた遊びが頻発するようになったこと、遊びや移動のパターンが園庭改変後に非画一的になったことなどが報告された。

第四章では、実証研究における具体的な事例を振り返りつつ、園児の遊びの流れと環境との結びつきについて、(1) 遊びの方向性が遊びそのものを通して立ち現れてくるものであること、さらに(2) 遊びの方向性に、場所の構造や環境がもたらす豊かなできごとが深くかかわっていること、さらに、(3) 園庭デザインのためには、保育士と園庭設計者のあいだで共有できる知見が必要であり、実際に生じた幼児の遊びを「地図」として可視化する園庭評価手法が、こうした協働可能性をひらく可能性があるとして論じられた。

本論文は、以下の点で評価できる。

- 1) 園児の自発的な遊びを導いている園庭の行為可能性(アフォーダンス)を明らかにするために、異なる場所において実際に生じた行為によって場所の性質を可視化する手法を用いて、従来の研究とは異なる角度から園児の遊びに園庭がもたらす環境の価値を浮き彫りにしている点。
- 2) 園庭における園児の遊びの流れと環境との結びつきについて、遊びの方向性が遊びそのものを通して立ち現れてくるものであること、さらに遊びの方向性に、場所の構造や環境がもたらす豊かなできごとが深くかかわっていることを実証的に示している点。
- 3) 園児の遊びの実証的な研究データを共有可能な仕方で可視化する園庭評価手法「エコロジカルマッピング」の提案によって、よりよい園庭デザインに向けた、研究現場、保育の現場、および設計の現場という異なる分野の現場を結びつける新たな連携の可能性を具体的に示している点。

以上のことから、審査委員会は全員一致で、炭谷将史氏の博士論文を合格と判定するものである。

なお、本論文の基礎となる研究は、次の論文としてまとめられている。(1); (2) はいずれも査読付き学術雑誌論文である。

【参考論文】

1. Sumiya, M., & Nonaka, T. (2021). Does the Spatial Layout of a Playground Affect the Play Activities in Young Children? A Pilot Study. *Frontiers in Psychology*, 12, 1651, 1-10. [査読付国際学術雑誌論文]
2. 炭谷将史 (2020) 保育所園庭の傾斜付砂場が園児に与える遊びの機会. *生態心理学研究*, 12(1), 3-13. [査読付学術雑誌論文]